

家は、石炭で走る鉄道に従事する労働者を描き始めている。

大戦期に現れた小山いと子の産業小説『オイルシールド』、暉峻義等編『炭礦作業図説』からは、国家戦略に直結した生産増強体制が浮かび上がる。「筑豊文庫」を開設した上

## 結び目

野英信や、ユネスコの記憶遺産となったヤマの記録画家、山本作兵衛の仕事にも敬意が払われているが、より重きを置かれるのが井上光晴の「長靴島」(53年)だ。10代の頃、長崎の崎戸炭鉱にいた井上は、底辺の労働者たちをへ描く資格と権利が文学表現にあるのかと自身にただした、初めての作家だと評価されている。

日本の炭鉱史が事実上閉じた後もなお、消耗品のように扱われた人々の怨念を忘れぬ、島田荘司『奇想、天を動かす』(89年)や尋木蓬生『三たびの海峡』(92年)などの小説の意義も、熱く述べられる。

著者は炭鉱文学の系譜をなぞることなく、資本主義社会の不条理の結晶と認める作品を、一つ一つ過去から拾い上げる。具象に徹したその読みは、「石炭の文学」に対する必然の態度であり、エネルギーと人間の生の関係を強く問うてくる。

◇いけだ・ひろし 1940年生まれ。京都大名誉教授。著書に『死刑の「昭和」史』など。

『幸福な田舎のつくりかた』金丸弘美著 人を呼び、経済を動かす「田舎力」を求め、全国を回ってきたジャーナリストの著者が、9か所の成功事例を紹介。若者が新風を吹き込

むレトロな商店街や、農村と都市をつなぐグリーンツーリズムなど手法は様々だ。地方を元気にするリーダーたちの熱い思いが伝わってくる。(学芸出版社、1800円)

よみうり堂

<http://hon.yomiuri.co.jp>

電子書籍、ご購入はこちらのサイトで

洋泉社新書



洋泉社MOOK